

モーダル・パースナリティ論

——「文化とパースナリティ」に関する一研究——

大学院博士課程

藤 本 浩 之 輔

1. 文化とパースナリティ

「日本人は清潔好きで勤勉である」とか、「農村では隣りの蔵のカベが落ちるとよろこぶ風習がある」という場合、それは一つの社会や集団に属している成員一般に、共通してみられる行動の傾向や心理状態について語っている。と同時に、一定の社会や集団は、その成員に共通なある種の性質を形づくることもあらわしている言葉である。われわれはその他、一つの社会や文化を形づくっている成員一般の性質や行動傾向についてのべられている言葉を数多く知っている。つまり、一定の社会や集団というものは、それに属する成員のパースナリティの中に共通なもの¹⁾のかを胚胎させることを認めているのである。普通パースナリティという言葉は、特定の個人を他から区別し特徴づけているような「個人の固有な心理的過程及び心理的状态の組織的集合体」という意味で用いられている。だが「文化とパースナリティ」というテーマで追求される場合のパースナリティでは、そのような諸個人を特徴づけているユニークな個性ではなくて、一つの社会や集団を構成する成員に共通にみられるパースナリティの諸要素が問題にされているのだということ²⁾を先ず指摘しておかねばならない。というのは「文化とパースナリティ」というテーマの設定こそが、この領域におけるパースナリティ研究の視角と理論に限定性を与えているのである。

「文化とパースナリティ」という用語と方法論は新らしい。だが、それは理論の分野に忽然と姿を現わしたのではなく、その関心は民族精神や民族性という形で民族や国家の歴史と共に古い。アリストテレスは北欧諸民族、アジア民族、ギリシャ民族の三つを比較してギリシャの優越性をといているし、²⁾シーザーは、気質、行動傾向、性格の要因を考慮してローマが周囲の蛮族達よりすぐれていることを書いている。³⁾近代においても「国民性」という形でとりあげた例として、ゴビノー、チェンバレン、トックヴィル等の名をあげることができる。昔から旅行者による印象記風のものは数多く書かれてきたし、ナショナリズムの勃興期には常に民族性に対する関心は強まってきた。だが、それらは大てい一民族についての印象の域をでなかつたり、自国民の優越性をステレオ・タイプに論じたものが多い。「文化とパースナリティ」に関する科学的研究が

1) R. リントン: The Cultural Background of Personality, p. 84.

2) 加藤秀俊: 「文化人類学における国民性の諸問題」(人文学報Ⅶ), p. 46.

3) A. ガーディナー: <The Concept of Basic Personality Structure as an Operational Tool in the Social Sciences.> in the Science of Man in the World Crisis by R. Linton(ed.), p. 110.

志向されるのは、1930年に入って文化人類学者達の間で、行動における心理的適応の叙述に「文化」(culture)の概念が使用されはじめてからである。すなわち「文化」が超有機的なものとして概念化されるかわりに、それはある一定の社会における人間によって創造されるものとして、さらに一定タイプの人間をつくりだすものとして考え直されるようになってからである。その飛躍的發展に功績のあったのは、サピア (Edward Sapir)、ベネディクト (Ruth Benedict)、ミード (Margaret Mead) であった。その後、精神分析学のパースナリティ理論をとり入れた文化人類学者達によって、あるいは精神分析学者や社会学者との協力によって、次々と輝かしい業績があげられてきた。その主なものをあげると、次のようなものがある。R. ベネディクトやM. ミードなどによる「国民性」(National Character)。A. カーディナーによる「基本的パースナリティ構造」(Basic Personality Structure)。R. リントンによる「基本的パースナリティ型」(Basic Personality Type)。E. フロムによる「社会的性格」(Social Character)。A. インケルとD. J. レヴィンソンによる「モーダル・パースナリティ」(Modal Personality)。

これらの理論は方法論にそれぞれ特異性があるとはいえ、その関心の中心は同じく一定の文化に属する大多数の成員が共通に分ちもっている性格構造であった。この論文では「文化とパースナリティ」の範疇に入る様々な理論を「モーダル・パースナリティ」で代表させたいと思う。けれど、インケルスによればそれは、「一定の社会のおとなの成員の大多数に共通してみとめられる比較的永続性のあるパースナリティの諸特性と型である」と定義されるからである。モーダル・パースナリティとは統計学のモード、すなわち最頻値に由来し「最頻的パースナリティ」と訳されるのが普通であるが、ここではモーダル・パースナリティという用語をそのまま使いたいと思う。

「文化とパースナリティ」に関する諸理論をモーダル・パースナリティ論で代表させることの意味をもう少しのべよう。それは、この小論を書くことの問題意識でもある。今までおこなわれてきた分析方法は、臨床的一特異質的な方法に集中されていたため、個別的には興味深く理解できなくもないが、そのことが理論的發展をおくらせてきた一面もある。例えば、著名なものではベネディクトの「恥の文化」と「罪の文化」、ゴラーの「口唇の性格」と「肛門の性格」などの類型化があげられるが、同じ日本の国民性に関して、ある場合は恥の文化、ある場合は肛門的性格という言葉で分析される。同じ問題をとり扱いながら用語が違うために、相互に比較検討したり理論的な妥当性を評価したりすることも困難な状態となっている。また異なった文化間でも罪の文化と口唇の性格とは、どこがどのように相違し、あるいは類似しているのかを比較文化的(cross-cultural)に研究することが著しく困難になっているのが現状である。したがって「文化とパースナリティ」の理論が科学の領域に市民権を獲得することができるためには、分析の方法論がより経験的に、より科学的に標準化されなければならない。われわれはいかなる文化的特性や行動特性を観察し、それをいかなる方法で、いかなるレベルのパースナリティ特性に帰属させたらいいのか。またそれらは社会過程に決定的な重要さをもつと思われるパースナリティの深層

部とどのようにかかわっているのか。そういった観点から、今までの臨床的・特異質的な研究や、社会・文化的要因からの推論だけによる方法のかわりに、第一義的に統計的・経験的方法でせまり、比較的標準化された操作によって一文化の成員に共通にみられるパースナリティ構造を抽出できる分析図式にアプローチすることが、このモータル・パースナリティ論のもくろみなのである。

一文化にモータルなパースナリティや社会的性格は、その社会や文化にぞくする成員に共通な基本的経験、つまり社会的、文化的、イデオロギー的要因に規定されて形成されるものである。機能する文化は、⁴⁾それ故に互に調整され統一された関連綜合体 (configuration) をなすが、その限りにおいてモータル・パースナリティも比較的一貫した関連綜合体をなすものと考えることができる。このようにモータル・パースナリティは文化規定的であるが、逆に一定のイデオロギーを生みだしたり、支えたり、あるいはまたその社会を固定化したり変革したりする性格的要因としても大きな役割を果たすのである。つまり、社会過程に作用をおよぼす心理的エネルギーとなるのである。したがって、ある思想が一定の社会に意識的に受けいれられても、成員のモータル・パースナリティの故に心底から受けいれられず、行動をつき動かす力にならないこともある。民主主義の思想もモータル・パースナリティのレベルに根をおろさない限り、思想としての役割を充分果さないし、一旦危機がおとずれた時には簡単に放てきされてしまうであろう。ヒットラーの台頭をゆるしたワイマル・ドイツの場合がそうであった。現在の日本にとって最大の課題は民主主義の確立であり、民主的パースナリティの形成であろう。だが重要なことは、民主主義の理論を単に知識として知ることや教えることではなくて、行動の用意性としての民主的態度をやしなうことである。そして更に、その思想を内から支えていく性格 (character)を形成することである。こう考えてくると民主主義教育の理論分野の中に、モータル・パースナリティ論が加えられることは基本的に重要なことなのである。次にそれをのべよう。

2. 教育とモータル・パースナリティ論

三党首立ち会い演説会 (60, 10, 12) での浅沼社会党委員長刺殺事件は、新憲法感覚の根づきを楽観する向きに大きな衝撃を与えたようである。われわれは、日本の戦前、戦中をふかく支配した悪伝統がすこしも死滅していなかったことを劇的にみせつけられたのである。久野収のいうように「影の内閣の首相である反対党の委員長が公開の席上で白昼暗殺されるような状況では、民主主義の原則はもちろん、議会政治も合法的支配も市民の自由も基本的人権も、すべては架空のおとぎばなしにかすぎない」⁵⁾ことを感じさせられたのだ。浅沼刺殺事件をめぐる様々な意見が交換された。相も変わらず、批判はマス・メディアと戦後の民主教育に向けられた。犯人が17歳だったことが、教育への批判を一層つのらせた。極端には、民主教育という名で暴力理論の教育

4) ここで文化という概念が用いられる時、それは、習得された行動と行動の諸結果との綜合体であり、その構成要素が或一つの社会のメンバーによって分有され伝達されているものを意味する。

5) 久野 収：民主主義原理への反逆，思想 (1960, 11)，p. 72.

をやっているという批難さえでてきた。⁶⁾だが、考えてみると、他人の立場や主張の権利をみとめないという態度、自分の思想が絶対に正しいと信じそれを他の生命の自由を奪ってまで主張しようとする態度は、実は全く民主主義とは正反対のものなのである。民主主義教育が行きすぎて若者達がのびすぎているのではなく、民主主義が不徹底であり、大衆の思想や感情の中に反民主的で絶対主義的な要素が温存されつづけていることを示す事件なのである。これ一つをとってみても民主主義の確立、それは現代の日本にとっていかに重要であり且つ困難であるかがわかる。だが、それは是非やりとげられねばならない課題であり、現代の日本の教育の基本的な問題でもある。

一般的に言えば、民主主義の基本的原理は「自由」である。そして民主的な方法とは、思想の自由、言論の自由、政治行動の自由を徹底的に尊重し、力でもって他人の自由を侵害しないことである。自由を主張するためには、自己の自由な行動に対する責任は立派に負うという自覚が前提とされ、同時に他人の自由を尊重するためには寛容な多元主義が前提とされる。更にあらゆる権力や支配から自由であるためには「平等」でなければならない。他の誰も平等な人格の保持者であるが故に、人は自由でなければならないのである。ここに、人は平等でなければならぬという意識と同時に基本的人権意識も生れてくる。人は生れながらにして誰によっても犯されてはならない尊厳な人格をもっている。大衆はそれぞれに自由をもち、平等で尊敬されるべき人格をもっているという自覚に至る時、大衆こそ社会の主権者であり主体者であるという意識が生れる。民主主義とは、自由を中核とした平等、基本的人権、主権者としての自覚によって支えられるものなのである。そして、それは単なる観念にとどまらず、行動の用意性としての態度 (attitude) のレベルにまで根をおろさねばならない。

自由を心理学的に分析すれば二つの側面がある。一つは一次的絆から解放されて独立し、個性化されていく過程である。個性化のおし進められていく過程は、一面自我の力の成長ということもできる。だが、個性化の過程の他の側面は、孤独が増大していくことでもある。安定と意味を与えてくれていた一次的絆から脱けだすことは、自分が孤独であること、すべての他人からひき離された存在であることを自覚する過程でもある。この外界からの分離は無力と不安の感情を生みだす。不安や無力や孤独の感情に耐え切れない時、人は他の権威とか強力な外部のものに一体化したり、服従したりする。だが、それは真の解決ではなく、結局は人間性を喪失するものでしかない。では、個人が独立した自我として存在しながら孤独ではなく、世界や他人や自然と結び合っているような積極的な自由の状態があるのだろうか。それは一口に言えば、フロムのいう自己の実現、つまり自分自身であることによって獲得できる。⁷⁾自己の実現とはどういうことかと言えば、自己のもつ潜在的な能力、人間としての本性の積極的な表現である。表現の形式は色々あるが、重要で基本的なものは、愛、創造性、連帯性、理性的な構えと献身の枠組など、いわゆる

6) 小汀利得：まず教育を建て直せ、毎日新聞 (60, 10, 14)。

7) E. フロム：自由からの逃走 (日高六郎訳) p. 248。

全パースナリティの自発的な表現である。積極的な自由の獲得には、この自発性、主体性といった自我の認識の仕方、自我と外部とのかかわらせ方が重要になってくる。こう考えてくると、民主主義の基本には主体的な自我というものがあり、日常生活のレベルにおける民主的態度は、パースナリティの中核とも言える自我の概念によって支えられねばならないものなのである。そうだとすれば、民主的人間の形成を目指す民主主義の教育は、態度形成をつらぬいて「自我」というパースナリティの中核にまでせまらねばならないであろう。そのためには、日本の大衆がいかなるモダル・パースナリティを分有するのか、いかなる自我の概念をもっているのか、そして更にそれらの規定要因や現在の社会での役割がわからねばならない。でなければ、自我の確立した人間、主体性のある人間、すなわち民主的パースナリティの形成のために、どこにどのように働きかければよいかということが明らかにならないからである。その領域に光を投げ与えるものこそモダル・パースナリティの理論なのである。民主的パースナリティの形成を目指すわれわれに必須的に要求される理論的道具は、科学的・経験的に構成されたモダル・パースナリティの分析図式であろう。分析図式の標準化に入る前に、われわれは先導者達が、一つの社会を構成する成員に共通な性格構造を分析するためにどのような概念道具を案出してきたかをみとめる必要がある。

3. モーダルパースナリティ理論——三つの場合——

カーディナーの方法——基本的パースナリティ構造 (Basic Personality Structure)——

A. カーディナーによれば「基本的パースナリティ構造」の概念が、社会学的研究のダイナミックな道具であるという認識は、ア・プリオリな判断にもとづくものではなかった。リントンによって調査された二つの文化 (Tanala と Marquesans) について制度とパースナリティを相関させようという目的で分析した結果到達した結論である。この分析の中で、彼は、神の概念は普遍的に存在するものであるが、神の加護を祈願する方法は子供達の経験とその社会において規定されている生活目標 (life goal) によって異なっていること、つまり宗教体制 (religious system) は親の訓育にもとづく子供達の経験の投影であるということに注目した。そして幼児期の訓育のように、成長していく子供に基本的な心理的布置 (psychological constellation) を形成するような諸制度を、それ故に「一次的制度」⁸⁾ (primary institutions) とよんだ。宗教的イデオロギーや祈願の方法は、大体においてこれらの基本的な心理的布置と関連をもっているので、前者は投射の過程によって後者から引きだされたものと考えられる。それ故に、投射体系 (projective system) の結果発展した諸制度を「二次的制度」 (secondary institutions) と称する。この相関が正しいことが確かめられれば、一次的な経験とその結果との間に「基本的パースナリティ構造」と名づけることのできる実体が存在していることを仮定することができるのである。⁹⁾ こうしてカ

8) カーディナーは、基本的概念として「制度」をおき、制度とは一定の社会内で伝達され、承認され、違反すれば個人、集団に障害をもたらすような思考と行動の固定化した方式であるとする。

9) A. カーディナー: opt. cit., p. 111.

ーディナーは、一次的制度→基本的パースナリティ構造→二次的制度という三段的な関係を考えたのである。一次的制度では育児の制度が重要視されるが、その他に食物事情、男女の人口比、農業生産方法といった衣食住と性に関する諸制度が含まれるし、二次的制度にはタブーの大系、宗教、儀式、民話、思考様式などが含まれる。

リントンの調査したポリネシアのマルケッサスの場合についてその実例をみてみよう。¹⁰⁾ この文化圏では男女の構成比は $1\frac{1}{2}:1$ である。また週期的な飢餓にもおそわれる。まず女性の人口の少ない点をとりあげてみると、その結果として一妻多夫制がおこなわれ、男同志のシットが強いがこれは生産阻害の要因になるので抑圧される。しかし他方、女の方ではできるかぎり多くの男をひきつけようとして、きわめて娼婦的になるがこれは別に抑圧をうける原因もないのでひどく発達している。そしてイニシアティブが女の手にある。その結果、男の間には女に対する恐怖感が発生し、また他の男に対する憎悪感は抑圧されているので、これも女に向って転位される。そこで様々な物語りや民話の中で、女がガツガツした食人女神としてあらわれて来たり、我々の社会で純潔な少女達が性に飢え残忍な男達との関係において占めていると同じ地位を少年達が占めるのである。つまり、男女人口比の不均衡を一次的制度、女に対する反感や恐怖を基本的パースナリティ構造、食人女神や女悪漢の物語を二次的制度として考えているのである。

また別の基本的パースナリティの側面がコマンチ族の場合にみられる。コマンチ族は略奪民族であり、若い強健な男性が全ゆる責任を引きうけていた。この社会には既得権や地位を保つための社会的価値の象徴の蓄積はみとめられず、常に新しく獲得されねばならなかった。子供達はあらゆる仕方で自尊心や進取の気性や勇気が養われた。大人になってからも、そういった心理的布置に矛盾するような制限は加えられない。それ故にコマンチ族における宗教は罪(sin)の概念がないし、失った地位の回復を神の恩寵に求めるという儀式もない。権力(power)を求めるものは単純にそれを願って自分が不屈の精神をもっていることを示せばよいのである。このように投射体系は簡単なのである。¹¹⁾

以上のように、カーディナーは諸制度の関連ということから、精神分析学の投射のテクニックを用いて基本的パースナリティ構造を推定構成するわけだが、その推論の妥当性、客観性を主張しうするためには、一定の社会を構成している諸個人の中にその存在が確認できなければならない。その技術として、カーディナーは伝記(Biography)の収集研究とロールシャッハ・テスト¹²⁾を考えている。これらの方法がC. デュボアによってアロール文化の研究の中で採用された。その結果、カーディナーのマルケッサス、タナラ、コマンチの研究の結論は確かであり、また制度の記述から基本的パースナリティを再構成することは困難ではないということが確かめられた。

10) A. カーディナー: opt. cit., p. 112.

祖父江孝男:〈個人・社会・文化〉, 現代社会心理学(6), p. 37.

11) A. カーディナー: opt. cit., p. 113.

12) DuBois はアロール文化に関して、単に制度機構の研究だけでなく、知能テスト、子供達の絵、37の一連のロールシャッハ・テスト、8人の伝記を収集した。

では、伝記の研究はどのようになされるべきであろうか。デュボアの場合には、アロールの住民の日常生活や研究者に対する彼らの反応の観察、夢の研究から住民達の性格構造がひきだされた。収集された伝記の半数に発見されたおどろくべき事実は、飢餓というテーマにふれた時はいつでも彼らの連想は地震とか洪水といった自然の災害におよんだことである。それらのことは基本的パースナリティの研究から予言され、期待されていたものと一致するものであったとカーディナーはいつている。伝記の研究は、制度から推測できないような基本的パースナリティに関連する特徴が引きだされうることもあるので重要なテクニックであるが、その収集には次の諸点に注意しなければならない。(1)多ければ多い程よいが、性、地位、年齢の違った人々によって書かれたものが必要。(2)住民達にその生活を物語らせる時、かれらの価値体系や社会の目的は当り前のことと考えられているために、得られたものが履歴書のようなものになる危険性がある。(3)必要なのは、子供時代の影響を内包している個人の横断面(cross-section)であり、発達¹³⁾の歴史であり、発達¹³⁾の歴史が進行していく時の適応の横断面である。

では次に、ロールシャッハ・テストはどのように有効であろうか。アロールに対するテストは、アロールのパースナリティについても特殊な文化についても知識をもたないオバホルツァー博士によってなされたものであるが、基本的パースナリティの概念の妥当性が確認された。ロールシャッハ・テストは個人や集団におけるある特殊な特性(trait)の発生起源については何も知らせることはないが、西欧社会では全くみられないような情緒的結合(emotional combination)のあることを示した。伝記においても現われてこなかったような特徴がロールシャッハ・テストによって発見された時には、その発生起源について新しい研究をはじめることができる。それ故に、ロールシャッハ・テストはすでに抽出されている結論を検討するだけでなく、他のテクニック¹⁴⁾では接近できないような新しい心理的実体を発見する道具でもある。

カーディナーの基本的パースナリティ構造の概念、抽出技術は以上紹介した通りであるが、我々がモータル・パースナリティを考えていく上に、どの点で有益でありどの点に注意しなければならぬかを考えるために、その長所と欠点をいくつかあげてみよう。まず長所からあげると、(1)文化人類学者による現地調査の材料にもとづいて、一次的制度とよぶ物質的、形態的要因を土台において基本的パースナリティ構造を説明しようとする点、(2)基本的パースナリティ構造の概念は記述の概念でなく、すぐれて操作的、技術的な概念であるために様々の社会や文化に適用することができる。(3)性格がダイナミックな統合体系として考えられ、投射の理論が用いられるために、性格の分析において単に文化型と文化型を結び結わせるにすぎないという結果に陥る欠点をまぬかれている。(4)ロールシャッハ・テストや伝記の研究、その他民俗誌的な資料の研究を加えて、結論の妥当性を検討するだけでなく、新しい性格特徴を発見する可能性があること。

一方、多くの批判も加えられており注意しなければならない点が多い。それをあげると、(1)一

13) A. カーディナー: opt. cit., p. 115.

14) A. カーディナー: opt. cit., p. 117.

次の制度→基本的パーソナリティ構造→二次的制度という規定関係は、カーディナーの図式的な説明と逆に、二次的制度が基本的パーソナリティ構造を規定する場合も考えられる。また二次的制度は必ずしもパーソナリティの投射のみによって作られるのではなく、他文化からの伝播によってもたらされる場合もあり、したがって投射体系に関係なく独立に存在する制度もありうる。ことが考慮に入れられていない。国際的なコミュニケーションの発達した近代社会では、とくにそれがいちじるしい。(2)一次的制度によって基本的パーソナリティ構造が決定され、そのまま固定化してしまうと考える点、幼児期の経験を非常に重要視する点においてフロイトの影響がなお多分に残っていると言わざるを得ない。(3)未開社会では歴史的記録が欠けているために、肝心の一次的制度の起源が明らかでなく、したがって基本的パーソナリティの形成過程が歴史的な発展の中にとらえられない。現在存在している一次的制度から基本的パーソナリティが推定されるため無理なこじつけがおこなわれることがある。近代社会の場合、一次的制度の変動は比較のおこりやすく、カーディナーの図式を機械的に近代社会の基本的パーソナリティ構造の分析に適用するのは注意を要する。

フロムの方法——社会的性格 (Social Character)

E. フロムはカーディナーやK. ホルネイとともに新フロイト派にぞくする精神分析学者であるが、一そう広い社会学的見地に立って、個人対社会及び文化の相互関係について新しい理論を提出した。フロムの理論の中心概念は「社会的性格」である。社会的性格とは、同じ文化の中に生活する大多数の成員に分有されている性格構造の中核¹⁵⁾であって、その文化に共同の基本的経験と生活様式の結果発達したものである。この社会的性格という概念は、ある一定の社会的状態において、人間のエネルギーが一つの生産的な力としてどのように形成され、作用するかを理解する場合、つまり社会過程を理解する場合の鍵となるものである。そして、それはただ一つの源泉を考えただけでは理解することはできないものであり、社会・経済的要因とイデオロギーの要因の相互作用を考慮に入れる時にのみ理解できるのである。すなわち、図式的に簡略化すれば、社会的条件が変化すると社会的性格が変化し、新しい欲求と願望が生れる。これらの新しい欲求が新しい思想をうみ、ひとびとにそれらの思想をうけいれやすくする。これらの新しい思想が、こんどは新しい性格を固定化し強化し、人間の行動を決定する。そして、社会的性格は更に社会過程に作用する生産的な力となるといえるのである。フロムは「自由からの逃走」の中で、この三つの要因（社会・経済的要因、社会的性格、イデオロギー）の相互作用の図式によって、ルネッサンス時代とファシズム時代のドイツの社会過程を説明し、その心理的エネルギーとなった下層中産階級の社会的性格の分析をおこなっている。

社会的性格が、社会過程に作用する生産的な力となるということはどういうことなのだろうか。それには「性格」というものが個人に対してもっている機能から問題にした方がわかりやすい。個人は社会に適応していく際に、社会の要求や期待との相互関係の中で一定の性格を形成す

15) E. フロム：The Sane Society, p. 78.

るようになる。ある性格が形成されると、それによって規定される欲求をもつようになり、そのように行動できれば深い心理的満足を感じる。フロムのあげている例を引用すれば、資本主義の社会では金をためたいというはげしい衝動をもち、ぜいたくに金を使うことを嫌う性格をもつ人間であれば、彼の衝動は資本主義的経済競争に打ち勝つために非常に有利である。これは、このような性格の経済的機能であるが、金をためたいという欲求をもつ人間は、そのように行動できれば同時に心理的満足も感じるのである。正常な人間に対する性格の主要的機能は、かれをして実際の見地から必要なことに即応して行動せしめるということであり、またその行動によってかれに心理的な満足にあたえるということである。人は、その社会でしなければならぬことをしたいと思うようになるという原理は、社会的性格が社会過程のなかで果す機能を考える場合もあてはまる。一つの社会の成員はその文化——イデオロギー、価値観、社会的期待、その他様々の行動形式からなる文化型——に適応していく過程で力動的な反応作用（文化型のままに形成されるのではないという意味）を通じて、一定の社会的性格を分有するに至る。その結果、社会的性格に由来する共通な衝動や良心や義務といったものによって、外的な強制によらないでも内的な強制によって動かされるようになる。こうしてひとびとのエネルギーは、その社会の行動にかくことのできない生産的な力となるように形成されるのである。いいかえれば、社会的性格は外的な必要を内面化し、ひいては人間のエネルギーをある一定の経済的組織の課題に通路づけるのである。¹⁶⁾

社会的性格は、一方では思考や感情や行動を決定するという側面ももっている。普通に考えると思惑とは論理的なプロセスであって、パースナリティというような心理的特性と関係をもっているとは思えないかも知れないが実際はそうではない。倫理的、政治的、社会的な概念になる時とくにそうである。フロムが一連の著書の中でくり返しのべているように、サド・マゾヒズム的な性格にとっては、愛とは共生的な依存を意味し、けっして平等関係にもとづいた相互の肯定でも合一でもないということ、勇氣とは進んで服従したり、苦痛に耐えたり、弱者に暴力を働らくことであって、権力に対して正義や個性を徹底的に主張することではないことなどを考えればうなずけるであろう。フロムのいうように「概念や教義はそれぞれ感情の中核をもっており、その感情の中核は個人の性格構造に根をおろしている」¹⁷⁾というのはそういうことなのである。だとすれば、ある集団や階級の中に発達している社会的性格が、ある思想や教義を受けいれたり、ある概念に集団特有の意味づけをしたりすることもまた充分考えうることである。したがって、逆に、一定の思想やある概念の意味づけのされ方を理解することによって、その社会の社会的性格や文化の精神を分析することができる。社会的性格と思想との間にはこのような関係がある故に、ある思想がある集団に意識としては受け入れられても、その集団の特殊な社会的性格のため

16) E. フロム：自由からの逃走（日高六郎訳），p. 312.

17) E. フロム：自由からの逃走，

p. 313.

18) E. フロム：自由からの逃走，

p. 307.

に実際には受け入れられないことがしばしばある。このことを、フロムはナチズムが勝利を獲得した時代の労働者階級についてのべている。ドイツの労働者達は、大部分はヒットラーが勢力を獲得するまでは社会主義あるいは共産主義の政党に投票し、これらの政党の思想を信じていた。ところがナチズムが攻撃を開始した時、政治的敵対者と衝突することはなかった。左翼政党の多くの支持者達は、かれらの政党が権威をもっていたあいだは、その政党の政策を信奉していたが、一度危機がおとずれるとたやすく放棄し、ナチの思想のために進んでたかうようになったのである。このような現象がおこった一つの原因は、ドイツ労働者の社会的性格にある。かれらの多くは権威主義的性格として特徴づけられるパースナリティ・タイプにぞくしており、確立された権威に対して根強い尊敬とあこがれとをもっていた。このような性格のゆえに、社会主義やワイマール体制における民主主義は真の意味において受け入れられず、比較的簡単にナチズムの思想の熱心な支持者に転向していったのである。つまり、左翼的あるいは民主的な思想はかなり広範囲にわたってはいたが、思想の重さとしては全く問題にならなかったのである。こう考えてくると、「思想が強力なものとなりうるのは、それが一定の社会的性格にいちじるしくみられるある特殊な人間的欲求に¹⁹⁾応える限りにおいてである」と言えるであろう。

社会的性格は、ある場合には社会過程に働くダイナミイトのような役割を果すこともある。すでにのべたように、社会的性格は社会構造を強化し固定化する作用を果すが、それは社会構造にみ合った社会的性格が形成されている時においてである。しかし、社会・経済的条件と社会的性格の間にズレが生じた時、つまり変動期においては社会体制を破壊させる方向において社会過程に作用する大きなエネルギーとなる。政治的・社会的・経済的条件が変化して新しい状況が出現しているのに、急速に適応変化することのできない社会的性格は伝統的な形で残存する。古い社会的性格は新しい状況の中で有効に機能することができず、様々のハンディキャップをこうむり、欲求不満がうみだされる。フロムはこの状況をドイツの中産階級についてのべている。中産階級は以前の状態の中でそれに適応した社会的性格をつくりあげ、中産階級の徳——質素、儉約、用心、疑い深さなど——を身につけていたが、経済的な発展は性格の発展をおいこしてしまった。それらの性格特性や徳目は近代的営業の中では次第に価値のすくないものになりつつあったが、彼らの社会的性格の中に遺物として残されていた。社会・経済的進化と心理的進化とのこのズレのために、心理的欲求はもはや通常の経済活動によっては満されることのできない状態になっていた。この場合、欲求不満や憎しみという心理的コンプレックスで反作用することになるが、従来の欲求も依然として存在し何らかの方法で満足を求めなければならなかった。それだけではなく、以前の社会的、文化的条件の中で養われてきた非生産的構えのなかに宿るサド・マゾヒズムの衝動はますます尖鋭化されていった。そういった衝動や欲求は現実の状況——経済的ひっばく、地位の没落、威信追求の心理への打撃——からひきおこされた憤りや欲求不満とからみ合って、社会・政治的場面にもちあげられ、現状の打開や変革を荒々しい方法で求めるようにな

19) E. フロム：自由からの逃走，p. 310.

る。こうした願望や衝動は彼らの性格にぴったり訴えるもの、不満の解消を確固として約束するように思えるものに熱狂的な支持を与えるようになる。ドイツの場合、この心理的力は既存の社会秩序を強化するかわりに、民主主義社会の伝統的な政治的・経済的機構を破壊しようとするグループによって利用されるダイナマイトとなったのである。

フロムの理論のすぐれた点をあげてみよう。(1)カーディナーの基本的パースナリティ構造の理論では規定関係が一方向的であったのに対し、フロムは図式化すれば、社会・経済的要因⇄社会的性格⇄イデオロギー的要因と考えて、イデオロギー的要因も社会的要因と同じく性格の規定因だと考える。そして社会過程の理解にはこの三つの要因の力動的な相互関係、とくに社会的性格の分析を考慮しなければならないことを説いている。(2)社会過程に作用する要因の中では経済的要因、とくに生産の様式を支配的だと考えていること。支配的というのはそれが唯一であるということや、最も大きいという意味ではなく、生産の方法(様式)が人間関係を規定し、生活様式や生活習慣を規定するという意味においてである。生産は人間の生存にとって基本的なものだからである。(3)社会的性格の概念は、ある文化の大多数のひとびとに見出される性格の特徴を単に合計したという意味での静態的な概念ではない。社会過程の中でダイナミックな役割を果す力動的な概念であり、またすぐれて機能的概念であること。(4)カーディナーの場合とちがって、社会的性格論には歴史的な条件が考慮されており、また一方独自の人間性(human nature)論に基礎づけられていることも指摘しておこう。

フロムの理論にも疑問は残る。たとえば、(1)中産階級の社会的性格——服従の追求、権力の渴望、敵意、金についてけちくさい感情など——についての深い洞察があるが、それらがどのような経験的操作によって抽出されてきたのか、どの範囲の人々が対象になったのかあきらかでない。様々な世論調査、態度調査をふくめた幅ひろい調査研究、比較的客観的なテクニックである投射テストなどの積み重ねのかわりに、精神異常者を窓口にして推論された結論であろう。だとすればそこに一つの限界がある。一定の社会におけるモダルな性格が抽出されるためには正常な人間について、客観的科学的方法での分析が、それを推論するに妥当だと判断されるほど充分集積されねばならないであろう。(2)フロムの理論は、基本的な原理に関しては示唆的であるが、それを他の社会や文化に適用してモダル・パースナリティ構造を操作的に抽出しようとする場合簡単に利用できない。つまり、性格の中核的部分と周辺的部分がどのように相互関連しているか、あるいはどのような文化型や行動型に注目して、どのようにパースナリティに関係づけるかという点になると明確でない。結局、カーディナーの場合にも言えるように「文化とパースナリティ」という観点から標準化された分析図式が欠けているということである。(3)フロムが『自由からの逃走』の中であげているドイツ中産階級の社会的性格——権威主義、破壊性、機械的画一主義——は、彼の問題意識にもよるのだが、当時のドイツ社会の文化との関係において分析された性格特性ではなく、資本主義社会の条件から推論された性格特性である。したがって、それは近代人一般に帰属する社会的性格であり、ドイツという精神的風土の中でのナチスの台頭やドイ

ツ・ファシズムを説明する性格的要因としては不十分である。(4)社会・経済的条件の変化によっておこる社会構造やイデオロギーと社会的性格とのズレは、フロムが社会過程を説明する際の重要な概念である。この場合注意しなければならないことは、政治的、社会的、経済的条件の変化が、その集団の成員の大多数の自由と幸福を約束する方向にむかっていると大多数の成員によって判断される時、そして彼らが以前の条件に対して憧憬を感じないような時には遅滞した社会的性格は急速に新しい条件に適応するであろうし、新しい条件を破壊するダイナマイトにはならないであろう。したがって、新中国の場合のような社会変革に、フロムの理論を機械的に応用して社会過程を予言することはできないであろう。文化遅滞(cultural lag)が単なる抽象的な慣性の原理ではなく、情緒的な利害関係との結合によっておけると同様に、性格遅滞は成員の大多数が以前の社会的条件や文化に対して情緒的な憧憬を抱いている時に顕著にあらわれるということ を考慮にいれなければならない。

インケルスの方法——モーダル・パースナリティ (Modal Personality)——

A. インケルスのモーダル・パースナリティ論は「民族的性格」(National Character)を叙述するための分析道具の一般論として提出されたものである。分析の対象とする一文化の範囲が一つの国家ないし民族に拡大されただけであって、モーダル・パースナリティ論が操作概念である以上、やはり「文化とパースナリティ」に関するすぐれた理論の一つであることに変わりはない。彼によれば、モーダル・パースナリティとは「特定の社会のおとなの成員の最大多数に共通にみとめられる比較的永続性のあるパースナリティの諸特性と型である²⁰⁾」と定義される。「モーダル」という用語が統計学上の「最頻値」(mode)からきていることはすでにのべた通りだが、これにあきらかなように、彼の努力は一文化の成員に共通な性格を統計的、操作的に抽出しようとするところにある。いままでの臨床的・特異質的な方法に対して標準化された分析図式(analytic scheme)の構成を提唱する。その論文『民族的性格』の中でも分析図式が提出されているわけではなく、分析上の一般的な諸注意についてのべているという印象が強いが、聞くべきところは多い。

まず問題になるのは、モーダル・パースナリティという用語で何を意味しようとしているのかということである。注意を要することは「最頻的」(modal)という概念は、心理的均一性(psychological uniformity)ということの意味するのではない。19世紀の人種理論や、ごく最近の民族的性格論でも、民族的集団や人種集団にはいちじるしい心理的均一性があるとしている。言いかえると、ある一定の社会に単一の支配的なパースナリティの様式と、せいぜい偏奇的な型を示す若干の二次的なパースナリティ様式があるだけだという仮説がもたれている。しかし、インケルスの場合はそうでなくて、民族的性格はパースナリティ特性の様式が発見されるかぎりにおいて存在するのである。したがって、民族的性格とモーダル・パースナリティの関係は、リントン

20) A. インケルス: <National Character: The Study of Modal Personality and Sociocultural Systems> in G. Lindzey's Handbook of Social Psychology, p. 983.

の「現実的文化型」(real culture pattern)と「典型的文化型」(culture construct pattern)の関係に似ている。ある状況における現実の文化的行動は一定の範囲にわたって分布し、ある一定の様式で最頻値を示す。少しずつ変差を示す文化的行動が分布する範囲を「現実的文化型」と定め、その中の最頻の様式をとって文化型の指標とする。それを「典型的文化型」と名づけて、文化や文化的行動の抽象的な記述に用いるのである。したがって、ある状況に関して文化型という言葉が用いられる時、その背後に、様式のいくらかずつ異なる現実の文化的行動を想定することが必要なのである。それと同様のことがモータル・パースナリティの場合にも言えるのであって、あるパースナリティ変量について考える時、現実にはいくつかの異なった様式を示すパースナリティ特性(personality characteristics)²¹⁾が存在していることが考慮にいれられている。モータル・パースナリティとは単に一番多くの頻度であらわれるパースナリティ様式ということを示すのである。

経験的研究を志向するインケルスの理論の特徴は、まず実証の問題を考え、現実にはモータル・パースナリティと言われるものが存在するかどうか、存在するとすればいかなる形態をとるのかを経験的に決定しようとする点にある。したがって、方法論的には「社会によって要求される」とか、あるいは「文化の諸様式にみ合っていること」というのは二の次の問題となる。たしかにこれは重要なことであって、われわれが社会的条件や文化の諸様式の分析から手をつけ、社会的性格を推定しようとする場合、おうおうにして性格のズレを量的にも質的にも適切に抽出しえないで、社会過程にもつ心理的な力を評価しあやまることがある。フロムの重要な概念である性格のズレはこのような経験的・操作的手続きを経ないかぎり、理論をあまりにも形式的に固定化し、柔軟な適用価値を喪失するであろう。

パースナリティの諸様式の経験的抽出をこころみる場合、枠組となる標準化された分析図式が必要になるが、どのような特性を示すパースナリティ変数が図式に編みこまれねばならないか。モータル・パースナリティは全体としての社会成員の行動を規定し、特定の思想を支持したり破壊したりする役割を果し、社会過程に作用する心理的力となるものであることを考えれば、その条件は明らかになる。それは個人の思考や行動の決定に重要な役割を演ずるという意味で、パースナリティの深層にある心理的に重要な諸特性でなければならないと同時に、それは既存の社会的文化的体系の維持、変革に大きな役割を果すという意味で、社会的に関連のある性格特性でなければならない。こう考えてくると、モータル・パースナリティの分析図式のうしろには体系的なパースナリティ理論が用意されねばならないことがわかる。

そこでインケルスは、心理学における様々な立場——精神分析学、学習理論、レヴィンの全体理論——のパースナリティ理論と、「文化とパースナリティ」の領域におけるそれらの役割を検

21) ここでパースナリティ特性(personality characteristics)という言葉を用いる時、それは、表層的なパースナリティ特徴について言っているのではなく、クラインバーグのいうような意味でのパースナリティの深層部にある中核的部分についていっている。したがって性格と同じ意味だと考えてよい。

討する。中でも精神分析学のパースナリティ概念を社会科学者に対して最も大きな衝撃を与えてきたものとして評価している。精神分析学では、パースナリティは周辺的—中心的 (peripheral—central) の深層次元に沿って組織化され、力動的な連関構造をもった比較的安定した体制であるとして概念化されているからである。精神分析学の中でも新フロイト派の理論、たとえばディックスやエリクソンの「自我」の理論、カーディナーの「基本的パースナリティ構造」、フロムの「自己実現」の理論は、分析図式の基本的枠組をつくる上で大きな価値をもっていると思われる。だが、すぐれた示唆を与えているとは言え、まだ基本的観点の提出や特異質的アプローチの範囲にとどまっており、中心的一周辺の特性に関して包括的で標準化された性格構造論を用意するに至っていない。そのことが、インケルスも言っているように、モーダル・パースナリティの経験的研究における主要な問題の一つとなっており、標準化された分析図式を欠くことの原因となっているのである。われわれはここで、心理学が逢着していると同じ困難にぶつかることになる。

ところで、標準化された分析図式が欠除しているために、どのような問題が研究上おこるであろうか。インケルスの言い分をきいてみよう。²²⁾第一は、分析に遺漏があるかないかを厳密に検証することができないことである。かりに、分析の中で若干の特性がのべられていない場合でも、それがもともとモーダル・パースナリティに存在しないからそうなのか、あるいは存在しても重要でないと判断されたからそうなのか、あるいは存在しているが分析者が無視したためにそうなのか、その辺のことがはっきりしないうらみがある。次に、これは理論的観点から最も重要なことであるが、モーダル・パースナリティの特異質的な記述が、比較社会的 (cross-societal) な一般化に大きな制限を加えていることである。特異質的な特性——例えば、ロシア人の口唇性 (orality) に対して日本人の肛門性 (analinity)——がパースナリティ構造の中でもつ内的連関、個人の行動に対してもつ役割といった質的な特徴に関する標準化された記述の範疇や共通な言葉を用いていない。そのため、とりあげられた性格の問題性それ自体は比較することができても、理論化された結果は記述の範疇の相違のために比較不可能となるということもおこるのである。

インケルスは、その他、モーダル・パースナリティを査定 (assessment) する場合の方法論、それらの規定因、社会・文化体系の中での役割についても述べている。また、モーダル・パースナリティの分析図式を標準化する場合の鍵となるパースナリティ変数として「権威との関係」「自我の概念」「主要なディレンマや葛藤とその処理の仕方」をあげている。だが、それらが包括的で力動的なパースナリティ構造の理論に基礎づけられない限り、研究者の間で共通して重要だと考えられている心理学的問題点だというだけではあまり有効でない。

インケルスのモーダル・パースナリティ論の中では、パースナリティ構造に関する理論は示されておらず、したがって分析図式も標準化されないが、いくつかの点では示唆に豊んでいる。(1) 今までは、モーダル・パースナリティ分析の方法論や抽出基盤に関して研究者の間でかなり混乱

22) A. インケルス: *opt. cit.*, p. 988~989.

があった。インケルスは諸個人のパースナリティ特性に関する経験的研究を正統的なものとし、その方法論として様々な質問紙調査、観察調査、投射テストを指摘することによって、研究の経験性と科学性を方向づけている。したがって、育児制度や集合的現象の研究は仮説提供源として、あくまで二次的なものである。仮説はパースナリティ研究を通して検証される必要があり、それ故にフロムのいう性格のズレの把握も適確になるにちがいない。(2)社会・経済的要因や育児制度からモータル・パースナリティを抽出する場合は、ある性格特性によって成員全体を均一化してしまったり、単一の最頻値しかもたないという錯覚を与えがちである。存在する複雑なパースナリティ様式を考えるインケルスの方法では、民族性などが分析の対象になる時、ステレオ・タイプに陥ったり、陳腐な同質化に傾いたりするのを防ぐことができる。

インケルスの議論にもいくつかの難点がある。われわれが、分析図式の標準化をこころみるためにもそれを検討しておかなければならない。(1)インケルスは、調査されるべきパースナリティ変数として、心理学的に重要な意味をもち社会的にも関連のある性格特性を考えるのであるが、具体的な手続きとして、そういった深層にある特性の諸様式が世論調査的な方法で抽出できるかどうか疑問である。余程正確な投射法でも考案されれば別であるが。したがって、パースナリティ変数におけるいくつかのモードという場合(インケルスは五つか六つという)ある状況における行動特性としてなら意味があるとしても、性格特性として意味があり、しかも調査可能な言葉に直せるかどうかは疑問であろう。やはり現実には、表面的な文化的行動の様式に関する経験的操作から推定していく方法をとるしかないのではなかろうか。そうだとすれば、パースナリティの構造論だけでなく、パースナリティと文化との関係と区別に関して更に洞察と研究が深められていかねばならない。(2)客観的で詳細に標準化された分析図式を作らねばならないような印象を受ける。だが、性格構造はいかに厳密におこなわれようと、しょせん推定概念であるから、分析図式の価値は推定の厳密性と理論的根拠を与えるということ以上のものではない。したがって、厳密でぼう大な記述の範疇を図式化し、様々なテクニックを用いて抽象された結果が、果してそれだけの努力に対応するだけの科学的価値があるかどうかどうかは疑わしい。未熟な標準化は分析の柔軟性と包括性をかえっていちじるしくそこなう結果にもなるのである。

4. モーダル・パースナリティの分析図式へのアプローチ

パースナリティ、文化、モーダル・パースナリティ

分析図式へのアプローチをすすめていくためには、パースナリティ、文化、モーダル・パースナリティに関するそれぞれの概念と相互関係をもう少し整理しておかねばならない。

パースナリティは、個人が外部世界とくに文化的条件と相互作用する過程において獲得されたものであり、定義すれば「刺激(外的・内的)に対する個人の反応様式を規定する心理的属性の関連綜合体」と言えよう。個人の反応様式を規制する属性であるから、その深層部にある自我、愛、創造の欲求などの基本的な人間的欲求と、周辺部にあつて比較的变化しやすい価値観、態

度、信念体系などをひろくふくめたものである。一方、性格（character）という概念はパースナリティと同義的に用いられたり、用法が混乱したりしているが、精神分析学などではパースナリティと区別して用いられるのが普通である。それは社会形成的ではあるが、パースナリティの深層次元にあって人間の行為を規定している中核的な心理的属性の部分についていう。ここでは性格を「パースナリティの中核にあって、その行為を決定する個人の基本的欲求構造の体系」と定義しておこう。したがって、性格には表層的な態度、価値、信念といったパースナリティ特徴は含まれない。このようなものとして定義されるパースナリティは、勿論人間の外面的行動を通して推測されるものである。一方、文化とは、人間の行動から推測される行動の諸様式と行動の内面的結果としての心的属性（価値、態度、信念）に、行動の外面的結果としての生産物を加えたものの総体であり、しかも一つの社会の成員の間に分有され伝達されているものである。つまり、行動を個人のカテゴリーに関して推定していったものがパースナリティであり、社会的なカテゴリーに関して別の方向に抽象構成していったものが文化である。一つの社会の成員は、文化との力動的な相互作用を通じて文化を内面化し、一定の心理的属性を形成する。その場合、文化の共通性の故にその成員の性格の中に共通な諸特性（characteristics）が内包されるに至る。その類似した性格特性の部分に関してモーダル・パースナリティという用語が用いられるのである。したがって、この場合、成員の共通にちもっている価値、態度、信念などの表層的な心理的属性をふくまないのは勿論である。それらは文化の範疇に定位されるものであって、もしそれを含むとすれば、われわれは行動から単に文化を、あるいは文化から文化を推定するという誤りをおかすこともありうるのである。したがって、モーダル・パースナリティ構造を考えていくうえで是非ともおさえておかなければならない重要な点は、インケルスも言っているようにそれを構成する諸要素が、それぞれの特殊性とかかわりなくパースナリティの中核に存在して、人間のエネルギー表出の様式を規定しているような性格特性であり、比較的永続的、固定的なものだということである。つまり、自我の概念、超克の様式、衝動や感情を処理する様式といった基本的な欲求傾向であり、その表現は単なる行動記述用語ではなく一般化された高度の抽象語であらわれる。それは、きわめて多様な具体的な行動様式で表現されるものであり、それ故にもちろん行動を規定する諸要素の一つだけを構成するものではあるが基本的なものである。この概念から考えれば、モーダル・パースナリティは行動の規則性といったものとは到底同一のものではあり得ない。様々な状況における成員の行動の心理学的分析を通して帰結されるような種類のものである。モーダル・パースナリティ分析の基準としてすでにあげたように、それは社会の安定や変動の規定因、つまり社会過程に影響を及ぼす心理的エネルギーとなり、それ故に心理的に重要な意味をもつと同時に、社会的に関連をもった性格特性でなければならないわけである。したがって、モーダル・パースナリティ構造を分析推定していくためには、そのような心理的属性の中核をすくいあげることができるような分析図式が必要になる。そしてそのためには、パースナリティの深層一周辺部分の力学について考慮し、包括的に構成された性格構造理論が必要になってく

るのである。それに関してはフロムの「社会的基本的欲求」(social basic needs)に関するアプローチが多くのことを示唆していると思われるので、次にそれについて考えてみよう。

基本的欲求構造

フロムは、人間の心理の理解は人間の存在の条件から生じてくる人間欲求の分析にもとづかねばならないとして、人間状況(human situation)の特殊性から考える。動物が環境に埋没した存在であるのに対して、人間は環境から分離しており対立的である。人間の誕生の第一義的に消極的な事実、人間進化の事実、すなわち理性や想像力を獲得したがそれ故に一方では自然との合一から投げだされているという事実、だが発展の前段階に帰ることはできないという事実、そういった状況こそ人間に様々のはげしい欲望をひきおこす要因なのである。分離(homeless)、無力(helpless)、不安、恐怖をさける唯一の道は自然の住み家(natural home)から完全に抜けだし、新しい住み家(home)を見出すことである。このような特殊な人間の存在の条件から、フロムは五つの型の基本的欲求を考える。関係をもとめる欲求(Relatedness)、超克をもとめる欲求(Transcendence)、存在の基底をもとめる欲求(Rootedness)、自己同一感をもとめる欲求(Sense of identity)、構えと献身の枠組をもとめる欲求(Frame of orientation and devotion)。これを簡単に説明しよう。

(1) 関係をもとめる欲求 自然(一次的絆)との一次的な合一を喪失すると同時に理性や想像力をもつ人間は、自分の孤独や分離を知っており、無力であることも知っている。たとえあらゆる生理的欲求が満たされたとしても、無力感や孤独の不安におびやかされているとは健全に生きることとはできない。この実存の不安のもたらす狂気(insanity)をさけるためには他者(二次的絆)との新しい合一関係にいらねばならない。ここに絶対的欲求としての、他との関係をもとめる欲求が発生する。この欲求は環境的(自然的、社会的)条件や個人の経験の仕方によって究極的には二つの表現形式をとる。生産的なかたちで満たされる場合は愛(Love)への情熱を発展させる。すなわち、自己の統一性や独立性を保持しながら、一方では相手を尊敬し相手の成長や幸福に積極的に関心をもつ関係である。もう一つ別の関係の仕方では孤独を克服する方法がある。強力な他者に服従しその一部になるか(マゾヒズム的)、逆に他者を支配する権力をもち他者を自己の一部にするか(サディズム的)である。支配も服従も共生的(symbiotic)な関係の仕方であり、頼るべき他を求めており、いずれも自由と統一を喪失している。この場合、関心の中心となるのは自分だけであり極めて利己的な構え(orientation)なのである。このような関係の中では、愛とは反対のナルシシズム²³⁾(Narcissism)の衝動が発現する²⁴⁾。

(2) 超克をもとめる欲求 人間状況の他の側面は被造物としてのそれである。人間は自分の意思や承諾なしにこの世に投げこまれ、またつれ去られるのである。人間は理性をもち想像力をもつが故に、この受動的役割に満足することはできない。物質的、精神的創造によって、無力で受動的な被造物としての自己を超越し、創造者としての自由の領域に到達しようと願う。ここに超克をもとめる欲求が発生する。創造(Creativeness)や愛によって自然や自己に超克すること

のできない場合は、逆にそれを破壊 (Destructiveness) することができる。生命を破壊すること
もまた超克への一つ解答である。²⁵⁾

(3) 存在の基底をもとめる欲求 一次的絆 (自然) から分離され、自分自身の足で立たねばならぬことは不安であり、恐怖にみちたものである。なぜなら、人間が自然に根ざした根拠をなくしたら人間はどこに存在し、そして誰であるのだろうか。人間はこのような隔絶と無力の状態に耐えられないであろう。ここに、存在の基底をもとめる欲求が発生する基盤がある。生産的な構えに成功する場合は、友愛にもとづく仲間との連帯性 (Brotherliness) の中に自分の存在の基底を見出すことができる。これに失敗する場合は、一次的絆にたようとする近親愛 (Incest) の衝動を発展させる。母性定着はこの構えの初源的な表現だが、それは血のつながりのある様々な組織——家族、氏族、民族——に拡がっていく。²⁶⁾

(4) 自己同一の感覚をもとめる欲求 自然からひき離され、理性と想像力を与えられている人間は、自分自身についての概念を形成し、「私」ということを知っており、また知りたいと願っている。人間は自然との第一義的合一を失っている故に、自分で決定し自分で生活せねばならない。また自分が他者と異なった存在であると認識する故に、自分が自分の行為の主体であると感じることができる。自己同一の感覚をもとめる欲求は致命的であり不可避免的なものである。権力による圧迫から解放され、自由が獲得され、諸個人が創造的に思考し、主体的に行動できる状況が存在する時、真の自己すなわち個性 (Individuality) を認識することができる。個性を発展させることができない時は、何物かに一体化して自己同一性の感覚を獲得せねばならなくなる。個人主義発見以前では氏族 (clan) に、次いで身分、宗教、職業などが自己同一性の感覚を獲得する手段とし役立ってきた。更に現代では、群衆の一員であることに自我の意識をうる傾向さえ現われてくる。いずれにしろ、それらの方法による同一感の獲得は、個性の確立とは対極にある同調 (Conformity) によるのである。²⁷⁾

23) 幼児にとって唯一の現実的であるものは、自分の身体と自分の欲求である。私と汝がまだ未分化の状態にあり、他者は自分の欲求を満足させる手段としてのみ存在するのである。客観的に認識される誰かとしてあるいは何物かとして存在するのではない。このような構えをフロイトは「一次的ナルシズム」と名づけた。8・9歳頃から他人を自分と異なった存在だとして意識しはじめ、それにつれてナルシズムの状態は弱まっていく。この子供の「初源的ナルシズム」は精神的発達過程に適合した正常な現象であるが、もし子供が他人を愛する能力を発展させ得なかったり、また失ったりするならば後年においても発現する。これを「二次的ナルシズム」と呼ぶ。ナルシズムに陥った人にとって唯一の实在するものは自分自身の思考過程であり、感情であり、欲求である。外部世界はあるがままの姿として客観的に認識されることがないのである。

24) E. フロム：The Sane Society, p. 30.

ここで「生産的構え」というのは、あらゆる領域の人間体験にみられる関係のしかたについて言っているのである。それは、自己自身の力を用い自分にそなわった可能性を実現する、つまり自己実現することができる構えのことを言う。そうとすれば人間は自由でなければならない、自分を統制するような力にたよってはならない。そして自己を主体的行為者として認識し、自己の行為が理性によってみちびかれるということでもある。したがって「非生産的構え」というのはその逆の構えのことをいうのである。

25) E. フロム：The Sane Society, p. 36.

26) E. フロム：opt. cit., p. 38.

27) E. フロム：opt. cit., p. 60.

(5) 構えと献身の枠組をもとめる欲求 人間はこの世界において物を生産し、行為をおこなう、人間関係を保っている以上、社会や人間についてある概念をもち、また行動の基準となるような判断の枠組や見通しをもつようになる。つまり、人生観、世界観などをもつようになる。たとえば、それが錯覚であり、またまちがったものであったとしても、それなくしては人間は生きていくことができない。ここに、構えと献身の枠組を求めようとする欲求の根拠がある。あるがままに世界や他人をみ、そして自己自身をみ、恐怖や不安によってゆがめられないこと、すなわち客観的な判断枠を發展させればさせる程、人間はその世界の中に確固とした位地を築くことができる。現象の表層をつらぬいて本質にせまる能力、すなわち理性 (Reason) を獲得することは人間の基本的欲求なのである。理性的なものの対極にある不合理なものであっても、その欲求への解答にはなる。理性がそこなわれる程度に応じて人間は不合理 (Irrational) な構えと献身の枠組を發展させるだろう。²⁸⁾

以上五つの基本的欲求の二分性をまとめておこう。

基本的欲求の型	生産的構え	非生産的構え
1. 関係をもとめる欲求……………愛	(Love)	対 ナルシシズム (Narcissism)
2. 超克をもとめる欲求……………創造性	(Creativeness)	対 破壊性 (Destructiveness)
3. 存在の基底をもとめる欲求……連帯性	(Brotherliness)	対 近親愛 (Incest)
4. 自己同一の感覚をもとめる……個性	(Individuality)	対 同調性 (Herd Conformity)
5. 構えと献身の枠組をもとめる欲求……理性	(Reason)	対 不合理性 (Irrationality)

フロムの基本的欲求に関する考えは以上のべたとおりであるが、欲求の表現様式を二分性においてとらえることの意義をもう少し説明しておこう。フロイトは二元論の立場に立って、人間を性悪とも性善ともみず、自己保存の本能と死の本能という二つの同程度の強さの矛盾する力に駆りたてられる存在だとみた。人間の内部にある一定の死の本能が他に向けられる時破壊性としてあらわれ、内に止る時自己破壊の本能となるのである。この立場からすると自分に対する破壊性は他に対する破壊性と反比例することになる。しかし、実際は自己に対する破壊性と他に対する破壊性は結びついたものであり、他に対する破壊性のない人は自分に対する破壊性もない。破壊性は先天的に一定量存在するのではなく、生命促進力に反比例して生ずるのである。つまり、成長し生きんとする生命の趨勢が妨害されると、この阻止されたエネルギーは変化の過程を経て生命を破壊するエネルギーに変形する。²⁹⁾破壊性は生かされざる生命の結果である。さきにフロムに従って規定した社会的基本的欲求の生産的構えと非生産的構えとは、まさにこの関係にある。人間の中に生産的衝動と非生産的衝動が一定の割合で存在するのではなく、前者を發展させることに失敗する場合、その割合に比例して後者があらわれてくると考えられる。だとすれば、非生産

28) E. フロム : opt. cit., p. 63.

29) E. フロム : Man for Himself, p. 216.

的衝動も人間に本質的な潜勢力なのであろうか。それには可能性 (possibility) の意味を考えねばならない。あるものが潜勢的に存在するということは、将来実現されるだろうことを意味するだけでなく、現在において実現の準備がなされていることを意味する。しかし、必然的に実現することを意味するのではない。それは丁度、種子の中に木が潜在するといっても、不適当な自然的条件のもとでは腐敗したり、芽を出さなかったりするのと同じことである。種子は芽を出すという第一義的可能性 (primary potentiality) と、不適当な条件のもとでは芽を出さないという第二義的可能性 (secondary potentiality) の二つの可能性をもっているのである。基本的欲求についてもこれと同じことが言えるわけで、生産的構えは第一義的可能性であり、正常で健康な環境のもとで発現する可能性である。それに対し、非生産的構えは第二義的可能性である。

衝動の二分性は、一つの社会で人間が生きていく場合の社会化過程との関連において考えられねばならないのは勿論である。だが人間の営む社会である以上、全く病的で不合理な社会でも、また逆に全く理想的である社会も存在しない。したがって人間は第一義的な可能性と第二義的可能性を二つながら発展させていると考えられる。そこで、われわれが実際に性格構造を考えていく場合に問題となってくるのは、基本的諸欲求や二分的な構えの表現される型式であり、更にそれらが生産的構え・非生産的構えの軸の上で、どのあたりに位置づけられるかということである。

モーダル・パースナリティの構造化の方向

社会的な基本的欲求の五つの型、表現型の二分性をみると、これらがパースナリティの中核に存在する心理的に重要な意味をもつ心的属性であること、そして社会過程にも大きなかわりをもつ属性であることがわかる。また、おそらくいかなる社会の成人にも見出される性質でもある。もちろんこれらの諸属性は、パースナリティの中で固定的な構造をもっているわけではないのであって、その核心部に力動的に関連し合ってアモルファスな形で存在するものである。一文化にぞくする成員は、このような満たされねばならない基本的な衝動と構えの二分性をパースナリティ内部にもちながら、一方ではその社会の要求する期待、文化、生活様式に適合して生活していかなければならない。したがって、成員のもつ基本的な諸欲求は、経済的、社会的、文化的諸条件に適合する仕方でのみ充足されることができるのであり、それ故に基本的な諸欲求の顕型様式は文化の違いに応じて異なってくると考えられる。こうして、基本的諸欲求の共通性と成員に対する文化の要求の共通性の故に、一定の文化にぞくする成員の性格には基本的に共通な部分が内包されるに至るのは当然であり、われわれはそれを名づけてモーダル・パースナリティと呼んだのである。

そこで次には、一定の文化にぞくする成員の大部分が、現実にとどのような様式でそれぞれの基本的欲求を充足しているのかを決定していく方法が問題になってくる。だが、この場合、基本的欲求の型に照応するように、モーダル・パースナリティをそれぞれ五つの型に分けなければならないということにはならない。一つの性格特性は、基本的欲求のいくつかを同時に満たすもので

ありうるし、また一つの欲求がいくつかの性格特性を通じて表現される場合もありうるからである。例えば前者の例として、日本人の性格特性の一つである「イングループ的性格」があげられるだろう。日本人は見知らぬ人々の中に一人でおかれた時には周囲に防壁をはりめぐらして、容易に心を開かない。汽車やバスの旅行で同じボックスに入りながら、数時間もあるいは十数時間もお互に黙りこくって無関心をよそおうのは普通である。行き先や降りる駅がわからなくて困っている人がいる時、不親切心からではなく、見知らぬ人間であるという理由から、心を閉ざし行動にインヒビションが働くのである。その逆現象として親しい仲間どうして汽車にのった時、大声で会話をし、笑い興じ、はては酒宴を開いたりする。その場合には、他人の存在や公共は全く眼中にないのである。この性格特性は外国人に対する態度において極端な形であらわされる。一個人として対処するのではなく「異人」という身分を与えて、日本人の仲間どうしの生活は厚い壁をめぐらして閉してしまうのである。このようなイングループ的性格は、関係的存在であること、自我、存在の基底などのいくつかの諸欲求を同時に通路づけている特性であろう。

また、一つの基本的欲求の様式がいくつかの性格特性のカテゴリーに分けて考察されうる例としては、たとえば「構えと献身の枠組」があげられる。それをあげてみると、(1)行動の基準が内部にあるか外部にあるかに関して抽象しうる性格特性。つまり、行動をおこす場合に自己自身の理想や価値判断にもとづくか、それとも他者の意向や期待を気にするかということであり、罪の文化—恥の文化にも照応する。(2)思考のしかたが、論理的—情緒的、あるいは理想主義的—現実主義的、(3)価値判断について、多元論的—絶対主義的、あるいは物質主義的—精神主義的、(4)感情や情動においては、表現的—禁止的、あるいは陽気—憂うつに関して抽象しうる性格特性などである。

したがって、実際にわれわれが、一つの文化にぞくする成員のモータル・パースナリティを決定していこうとする場合、今のところでは、一方の眼で基本的欲求の型をにらみ、他方の眼では現実の行動型や文化型をにらみながら、文化の背後に公分母として横たわっている性格的特性を推定していくというフレキシブルな方法が最も妥当であるように思われる。その場合、キャッテルやマクレランドによる「習性」(traits)の研究はある程度参考になるようである。キャッテルは208人の成人男性の日常行動を観察して得た生活記録の精密な因子分析の結果を総合して12の源習性を引きだしている。マクレランドは、それを更に6つのカテゴリーに整理分類して、それぞれいくつかの基本的な習性のリストを作っている。³⁰⁾だが、習性は個人の行動の奥底にあって、それらをコントロールしている心理属性である。われわれが、モータル・パースナリティとしての性格特性を考えていく場合には、パースナリティの社会的・文化的側面に注意が払われねばならないのは勿論である。

性格特性は、何度ものべてきたように、現実の文化的行動、態度、価値観などから推測されるべきであるが、単一の状況における行動の表現型から直接に推測することはさけられねばならな

30) 南 博：体系社会心理学, p. 125~130.

い。例えば「自己主張的である」という行動特性も、その裏にある動機、とくに無意識的動機をさぐってみるならば、色々な性格特性にもとづいていることがわかる。自己主張的な行動が実は利己的な衝動にもとづいたものであり、他人の幸福や利益を軽視し、自分の利益の追求のために頑固に自己の欲望や意見を押し通そうとするのかも知れない。また破壊的衝動のもち主であって、何にでも反対して打ちこわすことに快感をおぼえるという性格特性の表現かも知れない。あるいは、インフェリオリティ・コンプレックスの裏返しであったり、誰かに認められたいという野心にもとづく行動である場合もありうる。また、合理的な判断の枠組にもとづいて、自己の信念や理想を誰の前でもおそれることなく表現することができるという真の意味での主体的な行動かも知れない。このように、どのような性格特性にもとづいていようと、表面的に似かよった行動の形となってあらわれる場合がある。また逆に、真の意味で主体的自我の確立している人は、状況に応じて、その方が生産的 (productive) だと感じた場合は妥協的な行動をとるだろうし、いかなる人と言えども、彼の自由と人格を十分に尊重するであろう。だがある場合には、いかなる権力に対してであっても自己の立場と信念を守り通すかも知れない。つまり、表面的に様々な形をとる行動も単一の基本的な性格構造にもとづいているのである。したがって、われわれは様々な状況における顕型行動の観察を通じて、更に行動の心理的分析にまでは入っていかなければならない。モーダル・パースナリティは、行動様式のカタログとして示されるのではなく、行動を規定する心理的特性として示されねばならないという理由はここにある。

われわれが、性格特性を今までのべてきたような種類のものとして考える以上、それについて世論調査的な方法で多数の個人を調査することは不可能である。したがって、パースナリティ変量における最頻値という場合、言葉通りに一定の社会の成員の性格特性についての統計的操作を意味するのではなく、モーダル・パースナリティの考え方のプロセスであると考えべきであろう。われわれが、統計的処理をすることができるのは、外面的な行動型であり、せいぜい価値観、態度のレベルまでである。それ故に、モーダル・パースナリティは様々な状況における文化的行動の最頻値、価値や態度の最頻値に関する経験的操作を通じて推定されていくものである。その場合、ロールシャッハ・テスト、T・A・T、その他の投射的方法是仮説提供や結果の検証に有効であろうし、社会・文化的要因からの推定も補助的な方法として役立つにちがいない。しかしモーダル・パースナリティの分析のために経験的・操作的方法をとるからと言って、今までのような臨床的一特異質的なアプローチをとる分析方法を除外しなければならないということにはならない。除外することは標準化された分析図式をより有効で妥当なものにしていくためにプラスとはならないだろう。満足すべきパースナリティ理論が提出されていない現在では、標準化された分析図式にこだわりすぎて、形式的にだけ詳細な図式を作りあげることは意味がない。というより、それは分析の柔軟性と包括性をいじめるしくそこない、査定の結果でできた性格特性が心理的に重要な意味や機能的意義をもたないものになってしまう危険性もある。ただ、現実の文化型の中からモーダル・パースナリティの諸特性をすくいあげるための理論のアミは必

要なわけで、それには先にあげたフロムの基本的欲求の五つの型についての概念が相当役立つと考えるのである。一定の文化の中でそれらの諸欲求が表現される様式は、現実の様々な状況における文化型とのにらみ合せの上で決定されねばならないのは当然であるし、それぞれの範疇についての更に精密な分析図式は、特定の社会の成員のモータル・パースナリティの実際的な分析を通じて標準化していくという方向をとるのがより意味のあることだと考える。